

世界をぶっ潰して羽ば
たこう

ガオーさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は決めた。

世界で一番速くなりたいと。

親友と世界一有名なロードレーサーになろうと。

「さあ、いこうか翔あきとら」

「はっ、相変わらずキモオ、新あつた」

——俺達は、王者箱学をぶっ潰す。

京都伏見 一年 エース 御堂筋翔。
京都伏見 一年 アシスト 大坂新。

後に最凶タッグと呼ばれる、若いロードレーサーの物語。

目次

出会い	1
発射台の力	17

出会い

「おい、みどう！ 将来の夢てお前」

「あはははは!!」

いやな笑い声が響く。

なんでやの？

「笑かすなギャグか？」

「ムリやろこれは！」

「ムリムリ！」

『スポーツ選手』と書かれたボクの夢を、皆笑う。

なんでやの？

「おまえバスケで転がってボール追いかけてよったやろ」

「水泳もこいつまだビート版やで」

なんでやの——

ロードレースは世界で一番過酷なスポーツなんや。
自転車と身体ひとつで、一日100キロ走るんや。

世界で一番過酷なスポーツなんや！
スゴいんや、めっちゃ早いんや！

なのになんて——！

「俺が描き直したるわ」

クラスメイトの一人が、ボクが描いた夢を、汚そうとする。
やめろ、やめろや。

それはボクの夢なんや——！

「はいどーん」

「ぐばあ!?!」

その時、そのクラスメイトの顔面にドロップキックが炸裂した。

「よっちゃん!?!」

「おいお前、なんや!?! いきなりとび蹴り食らわしてからに!」

「お前、昨日東京から転校してきた奴やな!?! 何のつもりや?!」

「何のつもりや、だと? むかついたからやっただけだよバーカ」

——怒つとる。

なんでや。何のためや？

「人様の夢を笑つてたお前らの馬鹿笑いが気色悪かつたんだよバカ。バスケができないだけでなんだ。ビート版でしか泳げない奴は夢を持ちっちゃいけねえのかよ」

そいつはあつという間にクラスメイトを殴り倒し、ボクの方へ歩いてきよつた。

「大丈夫か？」

「——なんでや」

「え？」

「なんで助けたんや」

「え？あー……スポーツ選手。超かっこいいじゃん。それを笑つてるこのポケ共が許せなかつただけだ。噂には聞いてたけど、大阪つてアホが多いんだなー」

「……………」

「バスケとかサッカーでできる奴より、たった一つのことを頑張れるやつの方が、すごいに決まってるじゃん。なあ?」

100コのことできるより、1コのことトコトンできる方が絶対エライやろ

驚いた。

ボク以外にも、そんなことを考える奴がおったなんて。

「えーっと、名前なんだっけ?」

「——御堂筋。みどうすじ あきら御堂筋、翔」

「御堂筋か。俺は大坂新。おおさかあらた俺はお前のこと応援するぞ!」

そう言って、につこり笑った。

それがボクウと新の出会いやった。

「へえ！これがロードバイクなのか!!」

「……せや」

「ちよつと走ってみてくれよ、御堂筋！」

「うおー！速え!!　こんなに速いのかよ!!　お前、本当は凄い奴だったんだな!!」

「……」

「……ちよつと照れた？」

「な、照れてへんわ！」

「嘘だー、このこのー」

「キモいわ、お前！」

「決めた！」

「？」

「俺もロードバイク乗る!!」

「……は？」

「おーい、待ってくれよ……ぜえ、ぜえ……」

「……なんでついてくるんや……」

「俺は……お前と走りたいんだっての……察しろバカ……ぜえ」

「……意味わからんわ」

「アー!? 置いてくな、アホー筋ー!!」

「ぜえ、ぜえ……追いついたぞ、御堂筋」

「……めっちゃ速くなってるやん」

「当たり前だったの……でもお前、やっぱ本当にはえーな……50m走ならぜってえ負けねえけど……」

「なんで、笑ってるんや」

「だって……ははっ、お前に追いつけたのが嬉しくてな……楽しくなっちゃまうんだよ……」

「……」(キキイ)

「あ？ 休憩？ つてここ……病院？」

「君が翔が言うところの新君かー！」

「え、御堂筋のお母さん？めっちゃ美人だな！」

「翔から聴いとるよー。学校の親友やって」

「え？親友？」

「ちよ、母さん！」

「なあ、御堂筋のおばさん」

「ん、どうしたの新君」

「おばさん、死ぬの？」

「」

「おばさん、俺の母さんと同じ顔しとる。もうすぐ死ぬって顔しとる。俺の母さんが入院して死んだ時と同じ顔や」

「……………君がここに来るようになってから一年かあ。関西弁も、ずつとうまくなったなあ」

「引越してから随分経つしのー。まあ、まだ標準語が出るんだけど」

「なあ、新君」

「なに？」

「翔をよろしく頼むわ」

「」

「恥ずかしがり屋で、不器用な子やけど——これからもずっと、仲良くしてやってや」

「——当たり前や」

「……………あ、これ翔には内緒やで？」

「分かってるよ、おばさん」

「(……………丸聞こえや)」

「——おばさん、死んじやったな」

「……………」

「……なあ、翔」

「……なんや、新」

「ロードレース、あるやん」

「あるなあ」

「それに勝つて、勝ちまくって——俺達の名前を、天国まで轟かせようや。おばさんに、

『夢が叶った』って報告しようや」

「夢？——あ」

「スポーツ選手、なるんやろ。手伝ったるわ」

「手伝う、て……」

「ロードレース、俺まだ出たことないけど、確かアシストってのがあるんやろ？ エースをゴールまで連れてく奴や。俺がそれになったるわ。お前がエースで、俺がアシストや」

「——新」

「俺とお前が勝つところ、天国のおばさんに見せてやろうやないか！」

「——うん、ほやな。ボクとキミで、勝ち続けるで!!」

「じゃあ誓いのポーズや。拳を突き出せ!!」

——ガッ

拳をぶつける。

その痛みは、前に自転車で落車した時よりも痛くて、びりびりして——
ボク達の夢が始まった瞬間やった。

——

「母親が死んだ言うの、それ嘘やで。弱泉君」

「な、テメエ!」

「悪いな、エース君。これも勉強や思うて、今日は負けてくれや。今日勝つのはこいつやからな!」

「さあ行くで新!全開で引けや!」

「当たり前だ!!置いてかれるなよ翔ア!」

「くっそ、なんだあいつら!俺が追いつけないなんて……!!」

「エースナンバーのイチは、ボクがつける」

「アシストの証、二番は、俺がつける」

「!？」

「はぁ!？」

「コースは任せます」

「一勝負してもらえませんか、エースさん、それで分かってもらえると思うんで」

「勝負はそっちの上級生4人と、ボクと新、二人の4対2や」

「なんだ!?! 壇上に二人上がったぞ!?!」

「京都伏見にあんなやつがいたのか!?!」

「二人ともでけえ……!?!」

「おお、注目されてるなあ」

「なんや、緊張してるんか新」

「まさか。楽しくで笑っちゃまうわ」

『今年の抱負は、箱根学園ブツ潰しまーす』

「なんだあいつ!?!」

「マイク持ってハコガクに喧嘩売ったぞ!?!」

「ほら、新もなんか言いや」

「えー…しゃーないな」

『えー……。ゴホン。今年、一番最初に俺達がゴールするんでシクヨロ』

『京都伏見一年、御堂筋翔と大坂新』

『このインターハイを踏み台にして世界にはばたく男達です』

3年間のロードレース、インターハイで、後に台風の眼と呼ばれる京都伏見の男の伝説が始まる。

発射台の力

「頼むぜ福ちゃん！」

「頼みます金城さん！」

『千葉総北、神奈川箱根学園が残り500メートルでエースを出すぞお!!』

今泉、荒北二人はそれぞれのエースを発射するため、二人の後ろに回り押し出す。

「おおおおおおおおお!!」

「お願いします！」

「っけえ！ 福ちゃん！」

「神奈川と千葉のエースが飛び出した！」

「いつっけえええ！」

「どっちだ！」

インターハイ一日目のゴールを獲るのはどっちだ——

「俺らに決まってるだろタコ」

——まず最初に見えたのは、91番というゼッケン。

紫色のジャージ。

忘れなくても忘れられない、俺がこのレースで絶対勝つと誓った相手、御堂筋だった。

「み……御堂筋！」

直感で分かる。あの時と同じだ。

こいつ、ゴールを狙ってる！

「なんだあいつ！」

「京都伏見だ！」

「後続の集団から飛び出してきたんだ!!」

「あの壇上にいた二人がゴールを狙う気だ！」

—— 待て。二人？

「おい翔、はやりすぎだ。まだ俺のアシスト中だろうが。300mまで俺が引くんやろ」
「ぶくく……すまんなあ新あ。弱い弱い、弱泉君がいたからあ、思わず飛び出してしもう

たわあ。その間抜けな面、いつ見てもキモイわあ」

俺の横をすつと通り抜けるように見えたのは、御堂筋と同じ紫のジャージ。92番のゼッケン。白のキャノンデールだ。

「大坂……新あ!!」

中学時代、俺を負けさせた御堂筋と大坂。

俺はこの二人に騙され、5分以上の差をつけてやられてたんだ。

「てめえらエース狙う気かよー」

「くそが一年どもお!!」

御堂筋達はあつという間に俺を抜き、俺も追いつくため再びダンシングに入る。後ろからハコガクの荒北さんも追ってきているようだったが、後ろに構っている暇はない！こいつら、本当に速い！このままだとエースに追いつかれる！

「くーぐおおお！」

足がおつもい!!荒北さんの勝負で脚を使い過ぎた、けど動け、俺の脚！

「くそー張り付くのがやつとだ！」

とにかくオレが！オレが!! 気になる要素は払い落としておかなきゃいけねえんだ

!!

「あらら、付いてきてるやん今泉」

大坂がちらりとこちらを振り向く。

御堂筋に負けない長身。長い脚。

そして止まらねえケイデンス！

こつちはもう脚を使い切ってるのに、疲れてる気配が見えない！

「後続から御堂筋を引つ張ってきたっていうのに、どんなスタミナしてやがんだ!!」

「悪いねえ、今泉。スタミナだったら誰にも負ける気しねえんだわ」

「!!」

「総北今泉、箱学荒北、京都伏見の二人に必死に食らいつく!!」

「ゴールまで残り、300メートル!」

「予定通りやん、新あ」

「!？」

「レースに勝つために必要な物はなんやと思う? それはな——」

「勝利のことだけ考えること」

御堂筋の言葉を繋げるように、大坂が言う。

「ゴールの位置、地形、距離、人数、実力、速度を計算してそれだけ狙って走ることにする。耳にタコができるまで訊いたよ……」

「ボクはこのレース、くだらないファーストリザルトや山岳リザルトは初めから捨てとつたんよ？ その為に今の今まで、後続でボクは新の脚を溜めさせたんや。そして、残り500メートルで追いつき、新にアシストさせてボクがゴールを獲る！ぷくく……予定通りすぎて笑いが止まらんなあ」

「なあ、翔。そろそろアウター使つてや。俺もう疲れたわ。あとシクヨロ〜」
「!？」

「ぷくく……もうちよいがんばりいや新」

「お前だったらここから余裕で勝てるだろ。はよせえ。王様の為のゴール、さっさと獲れや」

大坂はそうばやくように言うと、御堂筋の前の道を空けた。

その際、俺と荒北さんの前を塞ぐように。

「くっそ、どけ大坂あ!!」

俺が叫ぶが、大坂はどく気配を見せない。

「上手い！京都伏見の大坂新、エースを出すタイミングと同時に後ろの二人をブロックング!!」

「くっ！一年があ!!」

「……そうそう。あとさつきのに付け加えるなら——自分のとっておきは、最後の際まで見せたアカンいうことや」

そう言つて御堂筋は——左手の指のテーピングを外した。

「アウター……？ まさか、封じてたのか今の今まで！」

「新がおるなら、ここに来るまでフロントで十分や」

フロントとアウター、同じギアでも大きな違いがある。

一言で言うなら、アウターの方がずっと速い。だがアウターはペダルが重くなり、使う体力も比べものにならないぐらい消費する。だがロードレースに置いてアウターは重要だ。加速するための必需品と言つても過言ではない。

なのに御堂筋は一度も使わずに……先頭まで……!?

「予定通りや……新あ。残りはボクが行く!!」

「ほらいけ、エース。さっさとハコガクぶっ潰してこい」

「いいいいいい……」

御堂筋が下ハンドルを握り、ダンシングを始める。

ゴールスプリントの体勢に……!

「イヤハアアアアア」

そして、俺は御堂筋に追いつけず――

ゴールまで残り150メートルまで足を残していた御堂筋はあつという間にエース二人に追いつき。

一日目、インターハイに最初にゴールしたのは、京都伏見だった。